Dropbehind

ziure

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｒｏｐｂｅｈｉｎｄ

【Ｎコード】
Ｎ０２０９Ｚ

【作者名】
ｚｉｕｒｅ

【あらすじ】
魔法が存在する世界の物語。魔法に特化する存在『六家』。その六家の中の一つの火神家から生まれた哲也。彼は魔法の力がなく火神家の一人として認められず家を追い出される……そして強くなった哲也は学園へ足を運ぶ……　※処女作です。駄文です。落ちこぼれからの主人公最強です。誤字・脱字よくあるかもです。それでも良ければぜひ温かい目で見てやってください。Ｒ－１５、残酷な描写については保険です。

第一話　落ちこぼれ

この世界には魔法が存在する。魔法を使うには才能がいる。
その才能は血縁の関係も大きく影響することが長い期間をかけて知られた。
その様々な血縁すなわち家系の中で火・水・土・風・光・闇、各属性ごとに特化する存在がいくつかあった。
それらから5年に1度各属性ごとに能力が高い家系を1家づつ取った存在。
人々はそれらをまとめて『六家（りくけ）』と称した。
俺はその時『六家』の中の一つだった火に特化した家系――火神家――の長男として生まれた。
名前は哲也（てつや）。
俺は生まれてからしばらく2つ年上の姉と同い年の双子の妹と過ごしていた……

俺が6歳の誕生日を迎える時、魔法の測定を行った。（この世界では6歳から12歳までの間毎年魔法の能力値を測るために様々な測定を行う）
俺の測定結果は普通の人たちと比べても低い結果だった。姉や妹はその測定で飛び出た結果をだしていたのにもかかわらず……
俺は自分が上手く魔法を使えてないのは前から知っていた。
両親や姉、妹からもよく教えてもらってたけど、成果はみられなかった。
でも、姉がいい成績を残していたから、俺にもいい結果が出てくれると少しだけ期待していた。

火神家の長男としていい結果がほしかった。
自分の劣等感から抜け出すためにも、縋(すがり)りつく結果がほしかった。
この測定は現実が甘くない事を思い知らされた時だった……

そして測定結果が届いた夜の日の出来事？？

「哲也、食事が終わったら私の部屋に来なさい。大事な話をする」
俺が、「はい」と返事をした後父は食べ終えた自分の食器を片づけて自分の部屋へと戻っていた。
俺はなんだろうと不思議に思いつつ待たせるのも悪いので残った飯をいっきに腹に入れ込み父の部屋へと向かった。

コンコンと2回ノックをして「入っていいぞ」という声を聞きドアを開く。
俺はそのまま父が座っていたソファーのテーブル越しの向かい側に座る。
それを確認した父は、喉を潤すようにテーブルにあったコーヒーを一口飲んでまじめな顔を向けてきた。
俺にはなんだかその顔、いや雰囲気に怖さを感じてしまった。これから言われる言葉が自分の身体にはわかっているのかのように……
「お前には……この家から、出て行ってもらう」
「え……？どういう、ことですか？」
身体とは違い俺の頭は唐突過ぎて意味が良く理解できていなかった。
いや、理解したくなかった。

父はそんな俺に追い打ちをかけるかのように、
「お前にはこの家の名を名乗る資格がない。要するにこの家から出て行ってもらう。これからは自分の好きな苗字を付けるといい。ただ二度と『火神』とは名乗るなよ。これは餞別だ。話は以上。明日の早朝までに出ていけ」
伝えることを淡々と告げられる父からの言葉は、今までで一番冷たかった。俺は父の雰囲気に萎縮されて何もできなかった。
父はそのまま俺にかまわず席から立ち上がり部屋を出て行った。バタンというドアの閉まる音が妙に寂しく部屋に響いた。
数時間後、俺は餞別としてもらったお金を鞄に入れその日のうちに準備をし、夜遅くに誰にも気づかれぬように家を出た。その日の月の光は妙に冷たく感じてしまった。

涙は不思議と頬を伝う事はなかった……

あの日から1ヶ月くらいだろうか……
父からもらったお金もすでに無くなっていた。俺はそこら辺の隅でうずくまって泣いていた。
未だにあの日のショックから抜け出すことはできない。
「おーい、そこの君」
誰かが話しかけてくる。
相手から話しかけてくるなんて久しぶりだ……そんな事を思いつつ俺はゆっくりと顔を上げる。
そこには一人の若い大人の女性がいた。黒目黒髪でこの世界では珍しい容姿だ。顔は見るからに美形。
背はそんなに高くないがプロモーションについては出るところはしっかりと強調されていて誰が見ても綺麗という感想を持つだろう。
「一人で泣いて……何があったの？」
「父に家を追い出されました」
「どうして？」
「僕が弱いから……ただの落ちこぼれだったから……」
「もし行く宛がないんだったら私と来ない？」
「えっ……？」
意味が良く分からなかった。
「私の所に来るかって聞いたの。君は弱くも落ちこぼれなんかでもない。私なら絶対君を強くすることができる！君には強くなれる素質がある。そんな君の才能を見抜けないむかつく父を見返してやるために私が鍛えてあげるよ」
俺に素質……？才能……？
しかも今はお金がないし、いる場所もない。これは俺にとってすごい好条件なんじゃないだろうか。
俺はとりあえず聞いてみた。
「付いて行ってもいいんですか？」
「んー……やっぱりいやだ」
「ええっ！？」

驚愕した。
「冗談だよー」
ホッとした。
「ふざけないでくださいよ……」
「ごめん、ごめん。ちなみに名前は楠木香織（くすのきかおり）。呼び方は……姉さんって呼んで。むしろそう呼んじゃいなさい」
「分かりました。よろしくお願いします、姉さん」
「うん、よろしくねー。それで君の名前はなんて言うの？」
「哲也です」
「苗字は？」
ちょっと考え……そして決めた。
「楠木です」
「そっか、んじゃ行こう哲也」
「どこにですか？」
「強くなるための修行に」
「はい。でも、俺って強くなれるんですか？」
今更ながらの疑問である。さっきも俺に素質あるだの才能だの言ってたし……
「もちろん！ただ私の修行にきちんと耐えられれば、ね」
「耐えてみせます。強くなれるならどんなに厳しくても！」
「その調子ならきっと大丈夫よ。改めてよろしくね哲也」
「はい！」

俺はそこから歩き出す……

誰よりも強くなるために……

第一話　落ちこぼれ（後書き）

感想・評価等いただけたらうれしいです。

第二話　姉さん（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

早速お気に入り登録してくださった方、本当にありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

第二話　姉さん

あれからしばらく時間がたった……

俺は今１５歳になり、背も伸びて身長は１７０前後。髪は赤色のショートで目は茶色っぽい。顔は姉さん曰く「かっこいいんじゃない？」だそうだ。身体は自分で言うのもなんだが、かなり筋肉は付いていると思う。修業の成果だ。

俺はずっと姉さんこと楠木香織に森の中でずっと鍛えてもらっていた。

まさか一度森に入ってそのままずっと森を出ることなく修行漬けの日々だとは思っていなかった……

そして俺は今、王国に向かって歩いている。どういう事情かと言われれば、それは昨日の朝に遡（さかのぼ）るのが一番分かりやすいだろう。

――

いつものように朝食を食べる俺と姉さん。朝食時の団らんというように、他愛もない会話を重ねていく。その中で今日の修行の内容を聞いてみたら、

「今日は私との１対１よ」

「マジ？」

しばらく時間もたってからねえさんとの会話には敬語はほとんど使わないようになった。

俺からすれば本当の姉のようだったし、姉さんは姉さんで敬語を使われるのはあまり好きではないらしいからだ。
それはそれとして俺がなぜ1対1というよくある手合わせの形式の鍛錬内容に一言目で頷かないのかと言うと、力に差がありすぎるからである。姉さんはマジで強い。だから今の俺ではまったく相手にならないと思う。
確かに強い相手との戦いは学ぶことも多いのかもしれないが、差がありすぎてはどうなんだろうと考えたからだ。
「マジよ。ルールは……なんでもありでいっか」
そして軽いノリで言われた言葉に俺は冗談抜きでビビる。なんでもありとか俺死ぬかも……
「いやいやいや。よくないから！明らかに絶望という文字が目の前に見えるから！！せめて少しでもいいからハンデつけてよ！」
だから、必死になってしまうのもしょうがないんだよ。
「ちなみに拒否権はなしだし、ハンデもなし。これは私があなたの師として課す最終試験だから。これ食べ終わったら早速始めるからね」
拒否権なしそしてハンデなしという言葉に俺は意気消沈してしまったが、ともに言われた最終試験という言葉に自分のさっきまでの考えを無理矢理にでも切り替えさせた。

そして朝食を食べ終え、食器を片づけた後外に出た……

「さっきも言ったけどこれは私との修行の最終試験だから、当たり前だけど手を抜くなんて考えないでね」
その言葉を最後に姉さんから感じる殺気によって……俺は自然と身構えた。
「始める前に言っておくけどマジでやるから。死なないように気を付けてね？」
最後の言葉はおどけるような口調で言われたけが、放たれている殺

気が和らぐことはない。
「そういうわけだから、真面目にね。じゃないと……ホントに死ぬよ？」
姉さんから出ている殺気がさらに膨れ上がる。その殺気に震えている自分を自覚しつつ、そんな自分に喝を入れるため頬を両手で一回パンと少し強めに叩き気合いを入れ改めて構える。
「じゃ、始めるよ？このコインが地面に落ちたらスタートね」
「わかった」
姉さんはそのコインを俺に見せてから、親指に乗っけて、弾く。
チンッという音を立ててコインは上に舞い上がり、そして重力により地面へと落ちていく。
そして落ちた瞬間、同時に二人が動き出した……

目を覚ましたら、俺は仰向けに倒れていた。
数分の攻防の後、俺の精一杯の一撃を与えた後は防戦一方となってしまいすぐやられてしまった……
しかし、よくあの一撃が当たったもんだと思う。わざと避けずに受けてくれただけかもしれないが。実際俺の一撃を受けた後、姉さんが満足そうな笑みが見えたような気がするし。
もしそうだとしても一撃を与えたことは嬉しかった。あの姉さんに一撃を与えられたことに。負けたのは悔しいけど……まだまだ自分

には修行が必要だということが分かった。
思考するのをやめ、顔を動かして前を見てみると、姉さんは俺の目の前でニコニコしながらそこに立っていた。
なんなんだ？と思いながらも無理矢理体を起こそうとする。俺が体を起こそうとしている様子を見て姉さんは手を貸してくれる。そして、近くにあった木に背を預けさして俺を座れせた後、一呼吸置いて言ってきた。
「合格よ」
「はい？」
いきなり言われた合格という言葉に俺の頭はついていけてなかったため素っ頓狂な返事をしてしまう。
「だから合格よ合格。あなたは私の弟子として最終試験に合格しました」
そんな俺に再度合格という言葉をかけてくる。
「どうも」
こういうときは素直にその言葉を受け取るべきだろうと思ったのでとりあえずは受け取った。
しかしなんとも納得しずらい、というかよく分からない。勝てるとは思ってないけどあんなぼろ負けしたのに合格って……姉さんの基準が分からない。
「なんだよー。もっと喜んでくれて良いのに……まぁいいか。というわけで君にはこれから私が指定する魔法学園に行ってもらいます」
「はいはい……って、ええっ！！」
適当に相槌をうっていたら、まさかの展開に驚いた。
「そんなに驚くことじゃないでしょ。学園なんて普通は行くところじゃない」
「それは驚くよ。学園って普通は１２歳になったら入るところじゃん。それなのに今までずっと何も言われなかったし、そのまま鍛えてもらって一人前として認めてもらったらギルドとかに登録するかと思ってた」

――――魔法学園とは文字通り魔法について詳しく学ぶ場所となっている。世界の状態や歴史についても学んだりする。大体は魔法について学びたい人が入るところで、入学できるのは１２歳から。第一部で３年、第二部で３年の計６年間みっちりと学ぶ。
ちなみに第一部と第二部はエスカレーター制となっていて第一部を卒業すると次の年にはそのまま第二部の一年生として勉学に勤しむ。
ギルドについては……簡単に言うとランク付けされている自分に合った仕事の依頼を受け、それをこなすところ。まぁ後々出てくるのでその時に詳しく説明しよう。
――――「ギルドって言うのも考えたけど、哲也には世間についてもっとよく知ってほしいからね。後は人との交流の楽しさも」
「１５歳になって今まで学園に行ってなかった俺が入ってもやっていけるの？てかまず入れるの？」
自分の思うもっともな疑問を問いかけてみた。
「入れるよ。試験とか少しあるかもだけどなんとかなるレベルには魔法について教えてるし。もしダメだったとしても私が無理矢理入れるようにするから安心して♪」
全然安心できないじゃん！というつっこみはなんとか押さえたが、その代わりとでも言うように仮に試験があったとしても絶対合格してやると言う意思が生まれた。
「姉さんって、そんなに権力ある人なの？」
「さぁどうでしょうね。私の素姓なんて探らなくていいから！てな訳で入ってもらうからね」
何が「てな訳で」なのかよく分からないが……
「こんな俺でも大丈夫なの？」
落ちこぼれだった俺は姉さんに鍛えられて強くなったのかもしれない。けど、あらためてそういう環境に行くのは腰が引ける。それに親からの言葉を思い出すとどうしても自分がダメに思えてくる。そう考えるとだんだんと落ち込んでくる……自信が失われていく……
「大丈夫だから魔法学園行きを勧めてるんでしょうが！私の弟子と

しての合格をあなたに出したんでしょうが！もっと自分に自信を持ちなさい！哲也ならやれるわ！私の、この楠木香織の一番弟子なんだから！」
そんな俺を見かねた姉さんは最初は少し怒ったような、そしてだんだんと元気づけるような口調で言ってきた。俺はうれしく思った。
それに一番弟子という言葉が俺の胸にすごい響いた。不思議と自信がこみ上げてくる感じだった。
「そうだよね！俺、行くよ……学園に！！」
「それでこそ我が一番弟子！じゃあ学園に行くための準備をしましょう。明日の朝にはここを出発してもらいますよ」
なぜに丁寧語？と思ったがそれは置いておく。
というか明日にはここを出発するのか……明日の朝ねぇ……
……明日？
「明日！？すごい急じゃん！！」
「しょうがないじゃない、そうしないと哲也が行く学園の第二部の入学式に間に合わなくなるのよ」
「分かった……とりあえず準備してくる」
もし俺が姉さんの最終試験に合格できなかったらどうするつもりだったんだろう……と心の中で考えていたがすぐに考えるのはやめた。
背中にある木を上手く使いながら立ち自分の足だけで歩けるくらいに回復したことを確認してフラフラしながらも家へ向かった。
「はいはーい、っていろいろと私も準備しないと……！」
姉さんも俺の後を追うように家に向かった。

なんてそうこうしているうちに朝を迎えた……

俺は2階からいつものような足取りで1階に下りて来てテーブルの椅子に座る。
――――昨日の傷については家に戻った後すぐに治癒魔法で姉さんにほとんど完全に治してもらった。疑問として「なんですぐ治してくれなかったの？」と聞いたら「忘れてた」と言われた。いたずらに舌を出すおまけつきで。
姉さんはテーブルに俺の分と自分の分の朝食を置き自分の椅子に座る。
お互いに手を合わせてから、
「「いただきます」」
ここでの最後になるかもしれない食事を口いっぱいに頬張る俺。そんな俺を見て微笑み自分のペースで食べ始める姉さん。今日は特に会話が生まれない……
しばらく沈黙が続きそんな空気を先に破ったのは姉さんだった。
「はいこれ、私からの入学祝のお金と剣よ。受け取ってね？」
俺が1階に来る前に準備してあったようでそれを取り出して俺に渡してくる。俺はその袋に入っているお金の量に驚く。それにこの剣は姉さんの愛用していた剣……
「まだ入学できるか分からないし。それにどっちにしろこんなに沢山はうけt――――」
「拒否権はないから、ね♪」
「分かりました、ありがたく受け取らしてもらいます」
姉さんは目が笑ってない笑顔をこちらに向けた。その笑顔からはある意味ではあの時のさっきよりも恐ろしいかもしれない。ホントに怖くて拒否という行動が出来なくなってしまった……

「それとこれ」
差し出されたのは一枚の封筒
「これは？」
「学校に着いたら学園長室に行って、これを絶対忘れずに渡してね。そうすればたぶん普通に入れる」
「うん、分かった」
「あとこれ。学園までの地図ね」
「なにからなにまでありがとう」
ホントに心の底から思った感情をそのまま言葉にして伝えた。
「いやいや、一番弟子のためだからね♪」
姉さんはそう言って微笑んできた。俺はその微笑みをついじっと見つめたままになってしまった。
こうやって改めて見るとホント綺麗な人だと思う。思わず、
「ほら、私に見惚れてないで。そろっと出発しないといけないんじゃない？」
「そ、そうだね」
不覚にも姉さんに見惚れてしまいそうになってしまった俺は、照れ隠しのように残った料理をすべて食べきって椅子から立ち上がった。
「じゃあ、行ってくるね」
「うん、行ってらっしゃい」
別れはとてもあっさりとしたものだった。
そうして俺は家を出た……魔法学園に向かうために……

――――――――――――――――――――――――――――

という感じだ。つまり俺は今魔法学園に入学するために王国へ向かっている。
しかし王国までの道のりもまだまだ長い。
魔法学園か……不安も多いけどちょっとは楽しみだ。
そんな感情を持ちながら、俺は平原が広がる大地を駆け出した……

第二話　姉さん（後書き）

姉さんとの戦闘シーンをとばしたのはここで主人公の技等を暴露してしまうとすぐにネタギレしちゃいそうだったからです。作者のアイディアのなさをお許しください。
治癒魔法などのこの世界での魔法の解説はもう少ししたらやるので今はスルーしておいてください。
重ね重ねすいません。

感想・評価して頂けたら嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0209z/

Dropbehind

2011年12月1日22時52分発行